

## 【研究ノート】 コロナ禍二年目のオンデマンド型「政治学」

瀧川 修吾

日本大学大学院総合社会情報研究科

### A study of the Second Year On-demand "Political Science" in a confusion of Corona (COVID-19)

TAKIGAWA Shugo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

The damage caused by the COVID-19 pandemic is now in its second year. This paper is a practical study of "Political Science" which provides for on-demand learning in this confusion. I aimed to consider the various merits of renewing to a high-performance personal computer, and the educational effect and precautions of using characters in on-demand lectures.

---

#### 1.問題の所在

今もって世界中を席卷し続けているコロナ禍により、昨 2020 年度以降の大学教育は劇的な変化を余儀なくされた<sup>1</sup>。恐るべき感染力を有するコロナウィルスの流行は、導入の是非を議論する遑すら与えず、二ヶ月足らずの準備期間でディスタンスラーニングの実施を、担当者「個人」に強いることとなった。私はこの歴史的な変化の最前線にいる一人の政治学者として、そこでおこなわれた講義の内容とこれに対する学生の反応を文書に纏めて公表することを喫緊の使命と考え、やっとの思いで前期を終えたばかりの夏季休暇中に「コロナ禍の「政治学」—オンデマンド型講義の実践例と考察—」を執筆した<sup>2</sup>。

コロナ禍において大学の講義がどのように行われたのかという実態については、当然、経験者以外の外部からは窺い知ることができない。まずもって学生の保護者や、ゆくゆく彼らを採用する側の利害関係者にはこれを知る権利があるであろう。また、このような困難にもめげず平素に勝るとも劣らない学習成果を残してくれた学生たちが数多居たという事実を、是非とも広く社会に周知したいという講義担当者としての切なる願いもあった。精励して結果を残した眼前の学生たちが、従来の大学教育を受けられなかった「学力の低いコロナ世代」などと安易にレッテル張りされるようなことがあってはならないと考えたからである。

---

<sup>1</sup> 本稿は 2021 年 8 月 15 日に起稿され、9 月 9 日に脱稿されたものである。よって、以下本稿の参考文献にもちいた URL への最終アクセス日は脱稿日とする。起稿日現在のコロナ禍は第五波とされ、通称デルタ株と呼ばれる変異型ウィルスの流行による感染爆発が生じ、その波は東京や大阪近郊の都市部に限らず地方へも波及している。また、一部では「医療崩壊」と断じざるを得ないような大変痛ましい事件すら発生し、まだまだ平常な社会への回帰は見通せない状況にある。  
<sup>2</sup> 2020 年度の後期が始まる以前に脱稿していた拙稿の公刊が遅れた理由は、実は他の学術誌に投稿したところ、掲載見送り（修正の上、次年度に再投稿）という

判定を受けたからである。ところが、私にとって拙稿は一日でも早くに公刊することが重要であった。本稿も含めた過去の幾つかの業績については、私自身にも政治学者の本分ではないという自覚はある。しかしコロナ禍に限らず、ICT の進歩がもたらした二十年来の社会の変化は、人類未曾有のものであり、機械ならぬ我々はその激流に揉まれて日々の仕事をしている。そこに従事する者にしか知り得ない断面を折に触れ公表する意義を、当事者自身がその場に居ながら判定することは困難なのかもしれない。評価は後世に委ね、私の想いは今後もその都度述べていきたい。

さらに、拙稿の執筆動機としては、オンデマンド型講義で得られた知見が私の想定以上に大きかったことから、これを未来へ向けて情報共有していくことの重要性を認識せざるを得なかったという点が大きいです。この点については、おそらく学内のFD会議等の機会を通じ、すでに多くの教育者が実感していることであろう。しかし、概ね講義の90分枠で開催されるこの種の会議では、有意義な話を複数の教員間で共有し合うには余りにも時間が短すぎるという点もまた、多くの教育者が痛感しているところではなからうか。くわえて、むしろこうした会議の様子を部外者が知るよしもない。

いずれにせよ拙稿は、執筆から数えて半年ばかりの紆余曲折を経ることにはなったが、幸いにして前年度末の本学紀要 No.21 (2021年2月) に研究ノートとして掲載される運びとなった<sup>3</sup>。そして、拙稿は、同じ研究科の言語教育学の専門家たちの協賛を得ることができた。具体的には、共著論文「コロナ禍において日本語教師はどう対応したか」(保坂敏子・小林亜希子・中村かおり・三浦千尋・渡邊百里・島田めぐみ)において、研究に着手する契機となった文献として、拙稿が取り上げられたのである<sup>4</sup>。

他ならぬ本稿は、二年目を迎えたコロナ禍におけるその続編として執筆されたものである。前稿(以下このように略記する)では、筆者たる私がどのようなキャリアを積んで大学教員となったのか、そしてそのパソコン(以下、PCと略記する)スキルはどの程度のものかといった、いわばこのテーマで文章を書く前提条件についても縷々述べなければならな

かった。それら諸々については本稿では極力重複を避けるので、前稿を併せて参照願いたい。

以下、本稿では、まずは二年目であるからこそ可能となったオンデマンド型講義をする上での準備や工夫につき、PCをはじめとする機材の刷新(ハード面)と、ソフトウェア等を活用した教育手法(ソフト面)に分けて紹介し、考察を加えたい。

本稿で考察の対象とするオンデマンド型講義は、私が最も長い教歴を有する政治学である<sup>5</sup>。2021年現在、本務先である三軒茶屋キャンパスでは月曜日の4時限に「政治学1」(前期開講科目、後期は「政治学2」が開講される)を担当し、他にも経済学部でも金曜日の4時限と5時限に「政治学」(通年)を担当している。今年度の履修者は、三茶キャンパスでは危機管理学部の学生が42名(前年度30名)で、スポーツ科学部の学生が15名(前年度27名)の合計57名、経済学部では4時限が152名(前年度332名)で、5時限が87名(前年度86名)の合計239名(前年度418名)であった<sup>6</sup>。以下、本稿で論じる内容は、以上の履修者の総勢296名及び前年度の履修者475名の学生を対象とする3コマの講義での実体験について述べたものである。

## 2.使用機材の刷新とその効果

我々文系の研究者の大半は、研究にせよ教育にせよ専ら文字をコミュニケーションツールに用いて仕事をする。よって、実のところ使用するのはワープロ機能くらいなので「高性能PCは不要」という話は、一昔前の講師室等でよく耳にしたものである。

<sup>3</sup> 瀧川修吾「コロナ禍の「政治学」—オンデマンド型講義の実践例と考察—」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.21、2021年2月)225~235頁。

<sup>4</sup> 保坂敏子・小林亜希子・中村かおり・三浦千尋・渡邊百里・島田めぐみ「コロナ禍において日本語教師はどう対応したか」(『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.22、2021年7月)、73頁。

<sup>5</sup> 筆者と政治学の関係は、インストラクター(レポート添削員)としては十八年、大学で講義を担当する講師としては十五年目のキャリアとなる。後期に実施予定のオンデマンド型講義としては、他にも危機管理特殊講義1(入管法・税関)と危機管理特殊講義2(国際化と外国人対策)があり、後者はもともと複数教員

によるオムニバス講義で内8回を担当する予定となっている。

<sup>6</sup> 前年度と比較するに、遺憾ながら経済学部4時限開講の履修者が半減してしまった。原因は、同科目が別の担当者による対面講義で開講されていたことが大きいと推察される。三茶キャンパスではゼミナールをはじめとする演習系講義は、原則対面でおこなわれたので、試みに対面式とオンデマンド方式のどちらを希望するかを学生たちに調査したところ、本人ないし家族に基礎疾患があるという明確な理由を有する者以外、全てが対面式を希望していた。当然の結果と納得した反面、通学したくともできない学生たちの無念も再認識せざるを得なかった。

今日、研究教育の場では、スキャナーやデジカメで画像をデータ化したり、画像編集ソフトでこれを加工したり、書籍を PDF 化して書棚を整理したりと、PC は様々な用途で大活躍である。しかし、そこまでのハイスペック PC が必要かといえば、少なくともコロナ禍以前の私個人はそうではなかった。

ところが、オンデマンド型講義で使用する教材、特に授業動画を Microsoft Power Point (以下、パワポと略記する) で作成し、MP4 の動画に変換する段となると事情は一変した。前稿でも PC 二台を教材作成と動画変換に役割を分けて作業にあたったことは述べたが、後者に関しては 10~20 分程度の動画を作成するのに、概ね 20~45 分の変換のための時間を要していた<sup>7</sup>。こうした事実も同僚たちとの日常的な情報交換により判明した次第であるが、お陰で私の常用 PC が性能面で不足していることが歴然となり、喫緊の課題としてまずは PC を一新することにした。

## 2.1 高性能 PC をめぐる陥穽

PC を高性能なものに刷新するに当たり、私が重視したのは特に CPU やメモリといった部品の性能であった。PC に詳しい人間からすれば当然の事実のようであるが、場当たりに形成された二十年来の謬見に囚われていたかつての私のような読者もいるものと推察し、ここで図らずも仰天することとなった二つの事実について述べておきたい。

まずは、中央処理装置といわれる CPU (Central Processing Unit) についてである。有名な Intel Core で例示すると、一般に市場では Intel Core i9 が最新で、他にも Core i7 や Core i5 を搭載した PC が販売されているのを目にするはずである。それゆえ、Core i3

などは最早型落ちで、性能も悪いものと認識しがちであるが、事実はそうではない。これらの英数字は CPU の種類であり、確かに数字が高い方が最新ではあるが、直ちに性能が優れている訳ではない。

そしてこの齟齬は、例外の逆転現象もありうるというレベルの稀少な話ではなく、具体的にはベンチマークやパスマークといったキーワードを検索サイトで調べてみれば一目瞭然である<sup>8</sup>。巷間ではどうもこの誤解を悪用した PC の販売広告が散見しているように感じられるが、他方で概ね CPU の性能が PC の値段に比例しているようでもある。

次に PC の主記憶装置であるメモリについてで、これも PC の作動速度を決定づける重要な部品である。私の認識では、メモリはある程度 PC に慣れた者が、静電気による事故等に注意し、自分で空きスロットに増設するものであった。ところが最近では、メモリの増設は業者に依頼するのが通常のように、もはやネジ回し一つで簡単にできる作業では無いとのことであった。

これらは常識といわれてしまえば、それまでであるが、外見からは窺い知れない PC の中身、つまりは性能に纏わる問題で、折角の機材刷新のための投資を無駄にしまいかねない重要な注意点といえよう。私は、幸い優秀な同僚と事務職員の有り難い助言のお陰でこの陥穽には嵌まらずに、納得の行く高性能 PC へと刷新することができた<sup>9</sup>。そして、当初は全く予期すらしていなかったが、ここを起点として実に様々な歓迎すべき効果が生じたといえる。

## 2.2 高性能 PC 導入の直接的効果

機材刷新の甲斐あって二年目からの講義動画は、

「コン ミニ館」<https://btopc-minikan.com/cpu-hikaku.html> を参照。ちなみに BTO とは「Build To Order」の略称で、自分で部品を選択して組み上げるタイプの PC を意味する。

<sup>9</sup> 不要不急の外出制限下では、通勤に首都圏を横断し往復 3 時間を要する研究室に備え付けの高性能 PC は、ほぼ使用できない。具体的には、まず 2021 年度の後半に十数万円のノート PC を、さらに 2021 年度の早々に同じく十数万円の自宅用デスクトップ PC を購入することで使用機材の刷新をおこなった。

<sup>7</sup> 講義動画は、当初「最少ファイルサイズおよび低画質 (852×480)」で作成していた。前稿では「15 分程度の動画に対して所要時間が約 45 分」としたが、本稿では少し表現を変えた。コロナ禍一年目は学生から「小さい文字が判別しづらい」という要望を複数受け、途中から「中ファイルサイズおよび中程度の品質 (1280×720)」でも試作したが、余りにも時間を要するため、断念せざるを得なかった。二年目からは、中ファイルサイズをメインとし、最少は低画質版として両方をアップロードした。

<sup>8</sup> 管見の限り幾つかのサイトが存在する。「BTO パソ

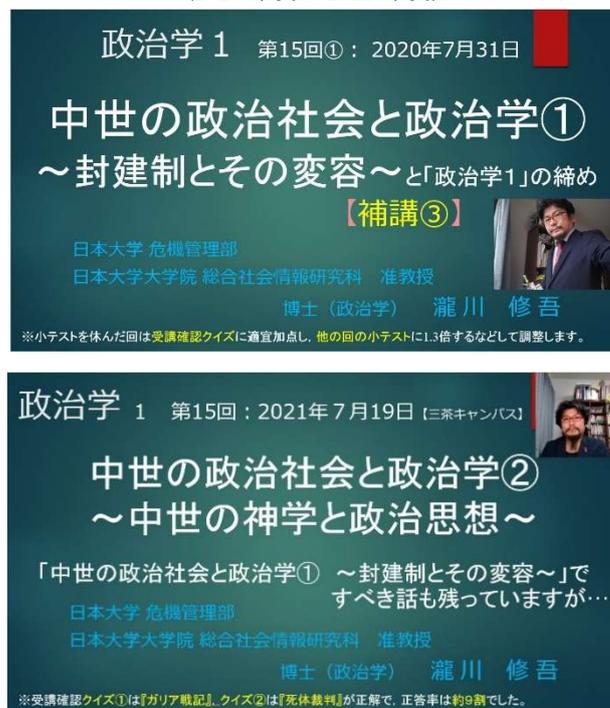
従来の「最少ファイルサイズおよび低画質(852×480)」を「低画質版」とし、「中ファイルサイズおよび中程度の品質(1280×720)」をメインとして提供することができた。動画への変換に要する時間も5～10分程度に大幅短縮することができた。結果、一年目に何人かの学生から寄せられた「講義動画の画質が悪く、小さい文字や図の細部が判別しづらい」という苦情もほぼ解消された<sup>10</sup>。

さらには、受講生へのせめてもの配慮として、毎回、講義冒頭に必ず挿入していた私自身が登場する挨拶の動画についても、PCの刷新により大幅に作業コストが削減された。これは、リアクションペーパー(以下、リアペと略記する)を見る限り「対面講義みたい」との好評を博してきた工夫で、ここで話す内容は、概ね講義内容と現在の社会状況とを橋渡しするような構成になっている。具体的には、時事問題や天候に纏わる雑談の他、事務的な連絡などもあり毎回様々で、講義で使用する参考文献の実物を手にしつつ紹介する回も数度はある<sup>11</sup>。時間にすると、数十秒程度の短いものから数十分に及ぶ長い回まであったが、総じて講義の導入に当たる部分で、平素の対面講義でも行ってきた工夫といえる。

コロナ禍一年目は、PC内蔵カメラで動画を撮影すると、どうしても画質と音声が悪悪になってしまうため、右に掲げた図1の上の写真のように、わざわざ別途デジカメで撮影した動画をパワポの画面に貼り付けて作成していた。ところが、刷新された高性能PC

を使用すると、図1の下の写真のように内蔵カメラでもデジカメと遜色ない映像と音声、しかもきわめて簡易に挿入できることから、二年目は全面的にこちらを使用することとなった。

図1 講義動画第15回の冒頭の比較  
(2020年度と2021年度)



出所：パワポとデジカメ、ないしPC内蔵カメラを使用して制作。

両者を比較すると、画面の縦と横の比率が異なり、PC内蔵カメラは横の画角、すなわち画面の幅が狭い。

<sup>10</sup> なお、講義動画の画質が悪いという苦情は、全体の割にも満たないものであった。当方も、スマートフォンの小さな画面で講義を受講する学生が相当数いるものと想定し、スライドの文字に使用するポイントを原則28以上に維持し、配色やフォントを極力判別しやすい組合せ(黒板モデル)に設定するなどの工夫をしていた。

<sup>11</sup> 平素の対面講義でも、学生たちに原著の面白さと接して欲しいという配慮から、参考文献を教室へ持参し適宜紹介してきたが、特に本務先と距離を隔てた非常勤先では図書の運搬に物理的な限界があった。その点、オンデマンド型講義では、その制約がない反面、どうしてもリアリティーに欠けてしまう。そこで、原著そのものを冒頭の挨拶に登場させたり(前稿、232頁で紹介したように受講確認クイズでも利用した)、原著の表紙をスキャナーで画像化しスライドに掲載し

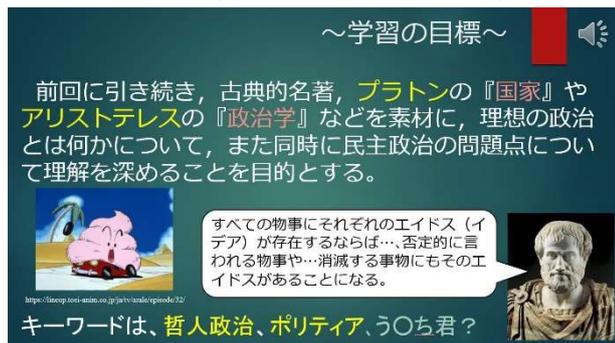
たりといった工夫をした。こうした一連の行為は教育目的であるから、著作権者の利益を侵害するような行為でない限り、かつての著作権法では無許可・無償でおこなうことができた。しかし、2018年の法改正により、授業でもオンデマンド型の場合は、教材をネット配信するため、著作権者の許可無く公衆送信をするには、教育機関の設置者が補償金を支払わなければならないとなった(同35条)。これにより著作物の利用が差し控えられるような事態を回避するためにつくられたのが、「授業目的公衆送信補償金制度」である。よって、本稿の素材である政治学の講義3コマも同制度に該当するものとして届け出ていることをここに付記しておく。以上、「一般社団法人授業目的公衆送信補償金等管理協会のホームページ」(<https://sartaras.or.jp/>)を参照(以下、ホームページはHPと略記する)。

実は、これがきわめて好都合で、なぜなら背景に余計なものが写り込むことを予防してくれるからである。くわえて動画撮影の手間が激減したことで、致命的なミスや不具合に限らず、仕上がりに納得がいかない場合の撮り直し(リメイク)も容易になった。

### 2.3 高性能 PC の副次的効果

旧来の対面講義では、私の場合、冒頭の挨拶は、講義内容の確認(前回までの復習や今回の展望など)と渾然一体になることが多く、かつ前回説明し終えた内容を丁寧に再度板書するようなこともほとんどなかった。ところが、オンデマンド型講義では、図2のように<sup>12</sup>、受講生が分かり易いようにとの配慮から、自然と「学習の目標」というスライドを毎回設けるようになり、つまりは雑然としていた冒頭の挨拶と講義内容の確認とが明確に分化することとなった。

図2 講義動画第12回(2021年度)の学習の目標1



出所：パワポと Active Clip lite (画面切り抜きアプリ) で制作。画像の出所は注12に記した。

このことで、講義内容の週をまたいだ前後関係が受講生には把握し易くなったと推察されるが、こう

<sup>12</sup> 近々、別稿を公表する予定であるが、オンデマンド型講義の利点として「キャラクター」の使用が容易になったことが挙げられる。図2で使用した画像は、右がアリストテレスで、左が鳥山明原作の『Dr.スランプ』に登場する「うんちくん」である。恥ずかしながら、前者の出所は入手から時間がかなり経過しており不明である(資料集等か)。後者は、作成時の窮状により公式サイトを見つけられず、画像検索で発見した画像を使用しURLを明示しておいたが、再調査したところ「東映アニメーション作品ラインナップHP」(<https://lineup.toei-anim.co.jp/ja/tv/arale/>)に適当な画像があったため、こちらに差し替えた。

<sup>13</sup> 前稿のむすび(235頁)でもこぼしたが「講義動画

した工夫に機材刷新で動画のリメイクが容易になったことが合わさり、思わぬ効果が生じた。結論からいうと、オンデマンド型講義の難所ともいえるべき、動画の時間調整を容易ならしめたのである。

そもそもオンデマンド型講義は、受講態度から時間の経過が推察できる学生たちが眼前におらず、しかも実際に授業を行うのとは異なり、大抵は雑務に追われて動画の作成が一向に成りできないことなどから、講義時間90分に換算していったいどの程度の講義内容を収録し終えたのかが把握しづらい宿命にある。そのため、あらかじめ動画を3~4分割するなどして、個別に時間を計測・記録し、時間調整を行いつつ動画の作成を進めていくことになる。つまり、最後の1本を作成し終えることで、ようやく動画全体の視聴時間が確定するわけで、分割したところで数分単位の誤差は避けがたい。

私の場合は、先述したように受講生たちが「コロナ世代、などと世間から侮られないだけの教育の質と量を確保することがまず念頭にあったため、勢い動画の総量も90分近くに達してしまうことが避けられなかった。当然、学生からは「長い」、「他の教科の勉強もあることを配慮してもらいたい」といった苦情が複数寄せられた<sup>13</sup>。コロナ禍一年目は、この時間調整に毎回苦心することになったのである。

この惨状は、前期開講の「政治学1」において時間調整のために記録したメモをみると一目瞭然である。一年目が平均81.6分で、ここだけをみると計画的にすらみえるが、個々の回に目をやると最長が第3回の104分、最短が第4回の46分といった具合に長短

が長い」という学生からの苦情が、実は一番に私を悩ませた。例年履修はしたが講義に全く関心を示さない(出席すらしない)学生がおり、そうした連中ほど単位を落とした腹いせに授業アンケートに憤懣をぶちまける傾向があることは経験上承知していた。しかし、毎回のリアペに書かれた意見は、全体の数%の少数意見でも重く受け止めざるを得ない。暗数も相当数あったはずで、独り善がりでも望まれもしない努力をしているのではないかと疑心暗鬼に陥った。しかし、回を重ねるごとにリアペの反応は変化し、動画が長いことは苦にならないと気遣ってくれる学生や、かつて動画が長いと批判したことを詫びてくる学生まで、複数現れたのである。これには感動で言葉を失った。

の落差も激しい。さらに、講義時間として予定されている 90 分を超過する回が一年目は合計 6 回もあった。対して二年目は平均 79 分で、最長が第 11 回の 93 分、最短が第 2 回の 56 分で比較的均整がとれており、90 分超過は 2 回にとどまった。

この状況を端的に説明すると、一年目の失敗経験を踏まえた二年目であったからということにはなる。しかし、一年目は動画作成に要する時間と手間が余りにも掛かりすぎるため、逐一修正をしていたのでは、公開の予定時刻に間に合わなかったのである。前稿では「動画の完成度にあまり固執しない」（229 頁）という提言をしたが、そこには時間超過を甘受せざるを得ない切迫した状況があった。対して二年目は、先述したように冒頭の挨拶と講義内容の確認が分化したことで、時間超過が判明すると瞬時に削るべき箇所が冒頭の挨拶と特定できた。しかも、デジカメを引っ張り出す手間暇もなく瞬時にリメイクに着手できる。つまり、元来が本編とは別建ての内容であることが多い冒頭の挨拶は、講義動画が 90 分を超過してしまった際の時間調整（カット）にきわめて好都合な「保険」として機能したのである<sup>14</sup>。

## 2.4 機材活用の重要性

機材活用の重要性は、当然、受講生の側にもいえることである<sup>15</sup>。コロナ禍二年目のガイダンスでは、一年目の反省を活かすべく、講義動画が「長い」という批判を受けた事実と共に、平素の対面式に見劣りしない講義の質を確保するために時間と労力をかけて授業動画を作成することへの私なりの想いをしっかりと説明するように心掛けた。それと同時に、一年目の受講生がリアペを通して教えてくれた「講

義動画の倍速再生」という手法を伝授し、コロナ禍の講義は学ぶ側にも主体性・能動性・積極性が求められることを訴えた。

ブラウザ上では、動画の再生速度は画面右下の設定項目から簡単に選択・変更でき、2 倍だけでなく、その中間の 1.75、1.5、1.25 倍も選択できるようになっている（逆に遅く再生も可能）。こうした機能を上手に使えば、受講生たちは 80 分の動画を 80 分かけて視聴する必要はないのである。その周知効果は絶大であったようで、二年目では、少なくとも前期を終えた現時点で「動画が長い」といった批判は、ほぼ皆無であった。

このほか、学生からの苦情があったわけではないが、制作者としては、どうしても講義動画に混入してしまうマウスのクリック音が気になっていた。これについては、千円強の一般的な販売価格で売られている静音タイプのマウスに買い換えることで、いとも簡単に解消された。他にも、主としてオンライン会議で使用する機材として購入したものであるが、外付けのスタンドタイプのマイクや卓上照明、卓上の小型扇風機なども、特に教育・研究の別なく、PC での作業一般を快適なものに変えてくれた。偏頭痛持ちが長時間にわたるヘッドフォン・マイクの着用を強いられることや、光量の足りない暗い顔、汗のにじんだ額で面談をおこなわねばならないことなどは、些末な障害ながら改善が望ましい。

こうした機材の導入や使用上の工夫による作業コストの軽減、アウトプットされる成果物の質の向上といった事柄についても、一層、情報共有がなされるべきであろう。

<sup>14</sup> 冒頭の挨拶の大部分は、確かにカットしても本編の講義内容に空白が生じることはない。しかし、「講義内容と現在の社会状況とを橋渡し」する役割、例えば学んだ理論を現代社会の事例で考察してみることでその普遍性を確認したり、逆に現代の常識では信じ難いその時代、その社会ならではの特性を再認識したりと、必ずしも単なる余談や雑談に終始しているわけではない。二年目は、時間超過でこれらカットすることが実に多かったが、これを繰り返すうちに、決して無駄話をしているわけではないことを痛感することも屢々であった。やがて平素なら講義時間外、主に講義

の前後に学生と対話をすることも頻繁にあることに気づき、そこで事情を説明した上で、リメイク後に全て削除していた没動画を、理解を深める「おまけ動画」と題して、講義動画とは分けてアップロードしてみた。これについては前期の終わり間際に一度試行しただけなので、まだ成果報告はできない。

<sup>15</sup> オンデマンド型講義を担当したことで、受講生の視点の重要性について再認識した。是非とも予算を獲得して学生スタッフを雇い、様々な教育上の試みをし、検証してみたいところである。

### 3.その他の工夫と反省点

コロナ禍一年目の講義では、まずもって Classroom や Forms それから Zoom や Meet といった、コロナ禍以前は使用頻度が高くなかったソフトウェアに慣れることに力を注がなければならなかった。その点は学生たちも同様であったはずで、前稿でも述べたように、学生からは連日似たような問い合わせが殺到し、しかもその内容は明らかに講義というよりは、PC やソフトウェア、通信システムに関わるものばかりであった<sup>16</sup>。

ところが、二年目になるとそうした問い合わせは、まるで嘘のように、ほぼ消滅した。その理由はいくつか考えられるが、概ね、学生たちがたった一年でディスタンスラーニングに順応できてしまったからであるといっても外的外れではなかろう。もちろん、大学における新学期ガイダンスでも、二年目ならではの様々な工夫が凝らされたには違いない。しかし、昨年度までは高校生であった1年次生の適応力の素晴らしさを考えると、やはり高等学校でもディスタンスラーニングに伴う相当な苦勞があり、先生方の真摯な指導と、生徒たちの悪戦苦闘があったものと推察される。

こうしたことから高大連携の重要性を改めて認識せざるを得なかったし、優秀な受講生たちをスタッフとして雇い、彼らが得た知見をさらなる講義の改良に活かす試みは想像以上の成果を上げることがあろう。

#### 3.1 前年度との比較の功罪

本稿も、はや終盤にさしかかっているが、二年目ならではの工夫というならば、やはり「前年度との比較」という手法ほどオーソドックスなものはないであろう。自分たちの学習成果を1年前の学生たちと比較できることは、受講生たちにとっても大きなメリットとなる。

言わずもがなこれも概ね好評を博したが、本稿ではあえて失敗した事例を紹介したい。次の図3は、古代エジプトの神権政治がどうして三千年もの長期にわたって安定的に維持されたのかを問う小テスト

において、前年度との比較をおこなったものである。

図3 講義動画第7回(2021年度)



出所：パワポと Active Clip lite で制作。

この設問の正答は、赤の「気候が安定しており、神の意思たる自然の摂理を王が読み取りやすかったから」である。ところが、困ったことに2021年度の正答率が81.4%であったのに対し、2021年度では69%に止まり、何と12.4%もの開きが出てしまったのである。

設問につき少しく解説しておく、黄色の選択肢、「美男美女が王であったから云々」というのは、講義を聴いていれば、まずこれは選ばないであろうという「捨てキー」であり、こちらの選択率は、完全といっても良い程に同じ割合を示している。つまりは、青の選択肢、「王が優れた建築技術を持っていた云々」と、正答肢とで選択を悩む構造の作問となっていた次第である。

よって、正答率に差が出た理由は歴然としており、二年目すなわち2021年度は、時間の都合でエジプトの神権政治の事例につき、詳しい説明ができなかったからである。しかし、結果が悪かったからといって、突然、この回だけ前年度との比較をおこなわないわけにもいかず、助手の雀には「やば...」というフォローをしてもらいつつ、事実をありのままに説明し、明らかにこちらに不手際があったことを謝罪した。

たとえば、前稿で紹介した「悪法もまた法なりか、それとも悪法に従うことは犯罪行為か」といった人類普遍の難問につき、前年度どころかもっと長いスパンでの比較、あるいは学部・学科の違いなどを踏

<sup>16</sup> 前稿、228頁。

まあ上での比較をしてみることは大いに意義があるであろう<sup>17</sup>。講義は「生もの」であり、同じ話を毎年しているわけではない。安易な比較は意味をなさないどころか、かえって善良な学生たちを傷つけかねない。

こうしたミスが生じた原因は、講義動画の制作に数日を要したがゆえに、小テストの出題時に「あの話はしたはず」と勘違いしてしまったことによる。平素は一回分の講義が中断し、数日のインターバルを経て再開するなどということは、まず起こりえない話なので、これもオンデマンド型講義に特有の注意点といえるであろう。しかし、講義動画が完成した時点で、それこそ倍速再生で全体を俯瞰し内容を確認してから公開すれば起こらなかったミスであり、これについてはひたすら猛反省であった。

### 3.2 音声読み上げソフトの活用と弱点

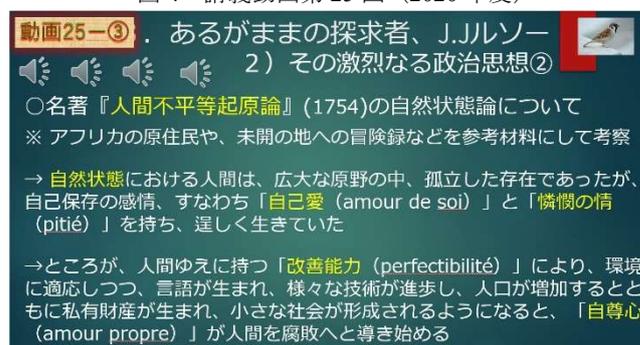
前稿でも白状したが、私は滑舌に自信がなく、遺憾ながら長期にわたる留学経験もないため、外国語は英語もドイツ語も speaking に至っては、全く自信がない<sup>18</sup>。しかし、たとえばルソー『社会契約論』の有名な冒頭「人間は自由なものとして生まれた、しかもいたるところで鎖につながれている」を流暢なフランス語で、あるいはアリストテレス『政治学』の「人間は政治的動物である」を美しいギリシャ語の発音で教えられる政治学者は日本に何人いるであろうか<sup>19</sup>。

そうした教育を受ける機会がなかった私のような人間にとって、救いの神ともいふべきものが「音声読み上げソフト」である。私は「一太郎」の愛用者であるため、ジャストシステムの「詠太」を発売以来使用し、専ら原稿の誤植を発見するために読み上げてもらって用途で使用している。こうしたソフトはネ

ット上でも無料で公開されており、かの Google にも備わっている。

これをオンデマンド型講義で使用してみようと思いついたきっかけは、先述したルソーの政治思想の解説においてであった。「私はフランス語の発音は全く分かりませんので」と前置きした上で、Google に備わっている音声読み上げソフトを、「フランス語の流暢な Google 先生」と形容して紹介しつつ、使用してみたのが図 4 である<sup>20</sup>。

図 4 講義動画第 25 回 (2020 年度)



出所：パワポと Google 翻訳で制作。

これまでの対面講義では「amour de soi (自己愛)」は、「アムール・ド・ソア」と、いわゆるカタカナ読みで発音し、受講生に教えるほかなかった。ところが、オンデマンド型講義では、PC のスピーカーにマイクを向け、「それでは Google 先生のお手本を聴いてみましょう」とアナウンスし、音声読み上げの操作をおこなえば、まるでネイティブの先生が TA として講義をサポートしてくれているかのような状況が作り出せる<sup>21</sup>。

なお、次なるキーワードの「pitié (憐憫の情)」では、私自身が慣れない作業で慌てていたためか、なんとアプリケーションの設定を「ドイツ語」にしたままで読み上げ操作をおこなってしまった。結果、当然ドイツ語風の「ペイシエ」という誤った音声が

ビスである。音声読み上げ機能は全ての言語で使用できるわけではなく、機械の音声ゆえのぎこちなさはあるが、こうしたサービスが無料で利用できることには驚嘆せざるを得ない。

<sup>21</sup> 同サイトを翻訳機能としてみると、「amour de soi」は「自己愛」と適切に表示されるが、その直後の「pitié」は「残念」と表示されてしまう。

<sup>17</sup> 前稿、233 頁。

<sup>18</sup> 前稿、229 頁。

<sup>19</sup> ラテン語に至っては、すでに正確な発音を再現することはできないという。日本にもアイヌ語はもちろ、沖縄をはじめとする様々な方言など、後世に保存すべき美しい響きがある。

<sup>20</sup> Google 翻訳 (<https://translate.google.co.jp/>) は、世界 108 の国と地域の言語に翻訳が可能な夢のようなサー

流れ、さすがの私も瞬時にこの誤りに気づき、「あっドイツ語だった」と思わず声を漏らし、すぐさまアプリをフランス語の設定に切り替え、再度読み上げ操作をおこなった。今度は「ピーチェ」と正しい発声流れ、そこで録音を止めることとなった。

当然、これはリテイクすべきであろうと思いつつ、可能な部分については編集して使用しようと思、実際に録音した音源を聴いてみたところ、かくもドイツ語とフランス語で同じ綴りの発音が異なるのかという点が何とも面白く感じたため、そのまま講義動画として採用することにした。これを聴いた受講生には、私の慌て振りが滑稽に聞こえた点はほぼ疑いないが、両言語の異質さをどのように捉えてくれたかまでは想像するほかない。

思想や哲学をしっかりと学ぶには、原典にあたり翻訳を疑いつつキーワードを吟味してみるのが一番である。たとえば、ホッブズは、自然状態における人間は「equal」であると主張しているが、これを安直に「平等」と訳してしまうと、どうしても微妙なニュアンスが伝わりにくい<sup>22</sup>。ここでの「equal」は、個々人の能力に違いがあることを大前提としたもので、「生きるためなら何をしても良い」のが自然状態であるから、力が強い者や頭が良すぎる者は、かえって周囲から警戒され、先制攻撃や騙し打ち、袋叩きにすら遭いかねないといった趣旨であり、日本語に訳すなら「対等」といった訳語の方が適切とすらいえる。しかし他方で、「equal」はやはり「平等」に他ならないからこそ、彼の思想は中世に幕を引くエナジーを持ち得たのである。このように、書かれた国の言葉の響きを持つ意義は大きいのである。

しかし、この便利な音声読み上げソフトにも意外な弱点があった。次の図5は、かの神聖ローマ皇帝カール6世の、44の単語と253文字にもおよぶ長い正式名を受講生に紹介するために用意したスライドであり、ここでも音声読み上げソフトを活用してみた<sup>23</sup>。

<sup>22</sup> 永井道雄編『世界の名著 28 ホッブズ』（中央公論新社、1979年）、105頁などを参照。原文は「Nature hath made men so equal in the faculties of body and mind …」となっている。

<sup>23</sup> カール6世の正式名称については、森脇優紀「東京

図5 講義動画第19回（2020年度）



出所：パワポと Active Clip lite で制作。

ところが、音声読み上げソフトに長い文章を読み上げさせると、どうやら何名かの受講生は「眠くなる。そうで、リアペには「機械の音声に切り替わった途端に眠気に襲われた」といった意見が少数ながらも複数寄せられた。

意外ではあったが、たしかに抑揚のない無個性な声というのは、そうしたもののなのかもしれない。動画の音声に、「えー」とか「あー」といった余計な長音が混在しすぎることを気に病んでいた私からしてみれば（不思議なことに意識すればするほど、かえって増えてしまうのである）、何とも救われるような想いがした。

こうした工夫は、すべて試行錯誤するうちに気付いたことであるが、講義で使用するパワポに音声データを保存しておけば、適宜再生できるわけで、無事に対面講義が復活した後も、引き続きおこなうことが可能といえる。政治学は極めて広範な雑学が求められる科目で、担当者の日々の読書量が講義の面白さを決することになる。今後もその基本軸は崩さぬよう限度を弁えつつ、こうした様々な工夫を凝らした教材の作成に努めたい。

### むすびにかえて

以上が一年目の成果と反省とを踏まえた、コロナ禍二年目の「政治学」の諸相である。しかし、その全容を紹介し尽くしたとは到底いえないし、考察を加えたい問題もまだまだ少なからずある。また、今後

大学経済学図書館が所蔵する神聖ローマ皇帝カール6世による同職組合規則の認可証についてモノとして、また史料としてみる西洋古文書』（『東京大学経済学部資料室年報 巻6』、2016年3月）、13、26頁を参照。

も講義の中で新たな工夫を試みる所存であるし、それに伴う反省や問題発見も続々と生じてくるであろう。

本稿は教育を主題とするものであるが、むしろ高性能 PC は、大容量の史料をネットで閲覧したり、これらを複数ダウンロードしたり、論文に掲載する図表の作成を容易にしたりと、研究面での使用においても劇的な効率化を実現してくれた。総じて様々なソフトウェアの起動と操作が、同時並行かつ円滑高速に行えるようになったからである。「弘法筆を選ばず」というが、今日、研究教育者はある程度の高性能 PC を選ぶべきといわねばなるまい。

コロナ禍の当初より「平素に劣らぬ講義を」という強い想いはあったが、一年目は何もかもが慣れないことばかりで、精神的にも時間的にも余裕は全く無かった。二年目はまだ半分を折り返したところであるが、負担が減った分、自分の講義を客観視できる若干のゆとりが生まれ、本稿で紹介した細かい修正や微調整に止まらず、二年目ならではの工夫も試行することが可能になった。それもこれも「コロナ禍の講義は学ぶ側にも主体性・能動性・積極性が求められている」という私の呼びかけに応じてくれた、数多の優秀な受講生諸君のおかげである。

本稿の読者には十分に伝わっているのではないかと思われるが、オンデマンド型講義の運営は、基本的に「孤独」である。しかも、業績評価とは無関係なこうした努力を密かに蔑視する教職員が少なからずいるなかで、私なりの信念を貫けたのは、偏に熱意ある学生たちの素晴らしいリアクションの賜である。これに見合った適切な言葉が見当たらないが、受講生諸君に最大限の感謝の意を捧げたい。

最後に「政治学」という学問との出会いについて少しく述べるならば、それは私が 18 歳、大学 1 年次であった。当時、前期の終わりのことであったが、迂闊にも私は末期癌の母親をろくに看病もせずに死なせてしまった。人生には後悔してもどうにもならないことがあると知り、私はより一層、何かに打ち込まずにはいられなかった。幸い黒川貢三郎先生の政治学は、まさしく私の生きる希望となる程に魅力的であった。コロナ禍でも講義の質を落としてはならないという私の強い想いは、この原体験に由来す

る。黒川先生には、ただただ感謝である。

(Received: October 19,2021)

(Issued in internet Edition: November 1,2021)